2023年7月16日 佐土原キリスト教会 礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書4章18～25節
説教題：招かれ、遣わされ、支えられ

前にもお話したかも知れませんが、1986 年のことですが、ガリラヤ湖の水位が大変に下がったことがありました。ガリラヤ湖は、南北が 21km、東西が 13km の湖だそうですが、その北西部の底の泥に中から、1 隻の舟が見つかりました。それを丁寧に掘り返して、詳しく調べたところ、何とイエスと同時代の漁船であることが分かりました。それは「ジーザス・ボート」として知られるようになりました。今もイスラエルに行くと、博物館に展示してある「掘り出された本物の舟」と、「それを基に再現された舟」を見ることが出来るそうです。長さ約 8m、幅約 2m、高さ約 1m というサイズの舟です。イエス様の当時、ガリラヤ湖には、そのような漁船が沢山浮かんでいたのです。今日の箇所で、シモン・ペテロやアンデレが乗っていた舟、ヤコブとヨハネが残して行った舟、それらの舟は、掘り出された舟と同じ型の舟だろうと思われます。この話に、聖書の歴史をまた身近に感じたことでした。

今朝の箇所は、イエスが最初の 4 人の弟子達を召される場面と、多くの人々がイエスの許にやって来る場面、2 つの場面が内容になっています。この箇所が終わると、「マタイ福音書」は「山上の説教」に入ります。この箇所は「山上の説教」の序説とも言える箇所だと言われます。22 節には「(弟子達が)イエスに従った」(22)とあり、25 節には「(群衆が)イエスにつき従った」(25)とあります。その「イエスに従った」人々に、「イエスに従って生きる者の道」を説かれたのが「山上の説教」ということになります。ですからこの箇所は、「山上の説教」の序説という意味でも大切な箇所ですが、同時に「信仰生活の全体像」のようなものを教えてくれるという意味でも、大切な箇所です。この箇所を通して「信仰生活とはどのようなものなのか？」、それを学びましょう。

1：信仰生活の始まり～主に招かれて

イエス様の宣教によってイエス様に従う人が起こされて行く、その様子を描くこの箇所は、まず「信仰生活はどのようにして始まるのか」、そのことを教えます。順序が前後しますが、23 節から後に、「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された」(23)とあります。イエスは、ガリラヤ中を巡って会堂で説教をされました。当時の会堂には、専門に説教する人はいませんでした。会堂管理者に許可をもらえば、誰でも説教出来たのです。後のパウロがそうであったように、イエス様の初期ガリラヤ伝道においても、会堂が大きな役割を果たしたようです。しかしイエス様は、説教をされただけではなく―(ここに「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された」とありますが)―説教と癒しによって評判が高まり、イエス様の許には様々な病気や悩みを抱える者がやって来ました。

大勢の人々がイエス様の許にやって来た理由、ひどく大雑把に言えば、それは人々に悩みがあったからです。人々は、病や色々な悩みを抱えていたのでイエス様の許にやって来ました。あるいは、近しい者が病や悩みを抱えていたので、御許に連れて来ました。イエスは、そのような人々を迎え入れられるのです。時には、そのように悩みの中からイエス様を呼び求める人に、「あなたの信仰があなたを直したのです」(マタイ 9:22)というようなことも言って下さいました。その人達は、イエス様について特別な知識があったわけではありません。ただ悩んだのです、そして解放者としてイエス様に期待したのです。イエス様は、それを「信仰」と呼んで下さいました。

私達は、どのようにして信仰生活を始めるのでしょうか。もちろん事情は、1 人 1 人皆違うと思いますが、しかし色々な悩みの中でイエス様(神様)を求める人も多いのではないでしょうか。(私もそうでした)。もちろん、「病の癒しを求める」、それがここに書いてあるように起こらないこともあるでしょう。しかし、それでも間違いないことは、それがどのような悩みであれ、主に期待し、主に助けを求める私達を、主は決して軽んじられないということです。いや、むしろその私達を正面から受け止めて下さり、私達を信仰生活へ―(イエス様に従う歩みへ)―導いて下さるのです。そうやって私達の信仰生活が始まる場合が多いのではないでしょうか。

しかし信仰生活は、(例えば)「悩みがある、だからイエスを求めた」、それによってだけ始まるのではありません。いや、それも含めて、もっと別の要素、もっと大切な要素があります。18～25 節でイエス様は、4 人の弟子を呼んでおられます。漁をしていた彼らです。舟の中で網の手入れをしていた彼らです。彼らは自分の舟を持っている漁師でした。カペナウムは、行きかう人の多い所です。良い市場があって、彼らの魚は良く売れたでしょう。贅沢は出来なかったでしょうが、生活して行くのには不自由はなかったと思います。その彼らがなぜ、イエス様に呼ばれただけで、網を捨てて、舟を捨てて、父親さえも捨てて従ったのでしょうか。

もちろん、彼らは、ここで初めてイエス様に会っているわけではないと思います。「ヨハネ福音書」によると、彼らのある者は、バプテスマのヨハネのグループにいて、イエス様のことについて、ヨハネから推薦も受けています。またイエス様の話を聞き、イエスというお方について彼らなりに考えて、「イエスこそ我々が待っていたメシア(救い主)だ」という結論を持っていたのかも知れません。しかし「マタイ福音書」は、彼らの側の理由を一切書きません。彼らの側の理由には、全然興味がないような感じです。なぜ書かないのか。それは「彼らの側の理由」以上に大切なことがあるからです。それは、「イエス様が彼らを招かれた」という事実です。

ウィクリフ聖書翻訳協会という団体があります。世界中で、聖書の翻訳をしている団体です。もう「国語」というレベルの翻訳は全部終わって、今なされている翻訳は「部族語」だそうです。ジャングルの中に入って、そこの住民と一緒に電気も水道もない暮らしをしながら、色々な危険を覚悟しながら、文字を作って上げるところから始めて、聖書を彼らの言葉に翻訳して行くのです。私等から言わせると、この世的には報われることの少ない大変な仕事です。私はカナダの神学校で、「ウィクリフで働きたいと思っている」という 2 人の人に会いました。私は 2 人に聞きました。「大変な仕事だと思うのだけど、どうしてその働きがしたいのですか」。そうしたら 2 人とも「分からない」と答えました。「分からないけど、それを自分の奉仕として取り組むようにという思いが与えられた」と言うのです。私はそれを聞いて、「神様が彼らを呼ばれたのだ」と思いました。弟子達もそうだったのです。イエス様に呼ばれた、ということが決定的なことでした。

私達の信仰生活はどうやって始まるのか。色々理由も説明出来るでしょう。でも、決定的なことは、イエス様が私達を招かれたということです。どんな理由があっても、どんな悩みがあってイエスの許に来たとしても、それでも決定的なことは、イエス様が、その人を招かれたということです。私は、学生の時に大きな悩みを抱えて、助けを求めて水曜日の午後に近くの教会に飛び込みました。しかし今思うと、それも神様が招いて下さったとしか思えないのです。いや、もっと前、小学生の時に友達のお母さんに誘って頂いて、英語の学びのために教会に通ったのも、神様が招いて下さったとしか思えません。

私達の信仰は、最終的には「私達の側の理由」を土台としたものではないのです。なぜ、あなたなのか、なぜ、私なのか、それは分かりません。しかし、イエス様が私達を招かれたのです。その招きに、私達はただ応えたのです。私達がここにいるのは、神に呼ばれたからです。イエスは言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」(ヨハネ 15:16)。神様(イエス様)が私達を呼んで下さり、私達の信仰が始まったのです。「私はイエスから『私について来なさい』と呼ばれた者である」、そのことをしっかりと心に留めたいと思います。

2：信仰生活の内容～主に遣わされて

神様(イエス様)に呼ばれて始まる信仰生活ですが、では信仰生活とは、いったいどのような生活、何をする生活なのでしょうか。

先程も触れましたが、イエス様に呼ばれた弟子達は「イエスに従った」(22)とあります。イエス様のところにやって来た群衆も「イエスにつき従った」(25)とあります。ここに書かれている人々は皆、イエス様に従ったのです。信仰生活とは、信仰とは、「イエス様に従うことだ」と言って良いのではないでしょうか。「献身者」という言葉があります。牧師とか宣教師とか、何かそのような仕事に就いている人のことを指す場合が多いと思うのですが、でも本当は、信仰者は、「イエス様に従って歩いている」

という意味で、全ての人が献身者だと思います。

では「従う」とは、「献身する」とは、どういうことでしょうか。イエス様が弟子達を招かれた時、彼らは祈っていたのではありませんでした。イエス様は、彼らが働いているところをご覧になって、「従いなさい」と声を掛けられたのです。もちろん、弟子達の場合は、その生活の資を置いてイエス様の後をついて歩くことが求められたのですが、そして今日でも、いわゆる「直接献身」に招く声を聞く人もいると思うのですが、でも注目すべき点は、「イエス様は、彼らの日常の生活の中に入り込むようにして彼らに声を掛けられた」ということです。それは、今日私達に対しても、「日常の生活の中でイエスに従うように」と、「日常生活の中で献身するように」と、イエスは声を掛けられているのだと思います。

「日常生活の中でイエス様に従う」とは、どういうことでしょうか。もちろん、それは日常生活の中で、イエス様の言葉の回りに生活を建て上げて行くことでもあるでしょう。しかし、ここで私が言いたいことは、もう少し別のこと、というか、もう少し具体的なことです。ある神学者がこう表現しました。「信仰に生きるということは、遣わされて生きることである」。私達が日常生活の中でイエス様に従う、それは自分の生きる場―(仕事の場、生活の場、その他生かされている場)―において「私はイエスに遣わされて生きているのだ」と、そのような意識を持って生きることではないでしょうか。そこには、自分の為すべきことがあり、役割があります。そこで接する人がいます。そこに共に生きる人がいます。私達はその人達に、役割に、誠実に関わることによってイエス様に従って行くのです。共に生きる人に愛をもって、心を注ぎだして、関わることで、イエスに従って行くのです。マザー・テレサが自分の活動について聞かれた時、彼女はこう答えています。「私は社会福祉のためにやっているのではない。キリストに仕えようとしているのです」(マザー・テレサ)。彼女は特別な人です。しかし彼女も、イエス様に従い、イエス様に遣わされて人々の許に行き、心を込めて関わる、そういう意識を持って奉仕をしたのです。イエスに遣わされた場で、イエスを見上げながら人と関わる、与えられた役割を果たす、それが日常生活の場でイエスに従うことではないでしょうか。

カナダ人のカルビン・シルベルドという人が父親について書いた次のような文章があります。「魚屋という商売を通して、父はフルタイムで、王なるイエスに仕えている。店に来る客は、それを感じるのだ。この店が街で一番安く魚を売っているわけではないし、忙しい金曜日の朝なんか勘定を間違えることもある。罪を犯さないわけじゃない。でも、あの店は、ただ清潔で笑顔の店員が良い魚を良心的な値段で売っている店なんかじゃない。そこには、買い物をする人をハッとさせるほど生き生きとしたスピリット、笑い、楽しさがある。父の手――私の 2 倍はありそうな節くれ立った指で、鮮やかにサバをさばくのを見ていると…そして、1930 年代の苦しい時期にも魚の内臓を取って、自転車をこいで、魚を売り歩いていたことを思うと…文句一つ言わず店で輝き、誘惑にも耐え、信仰を持って主の御顔の前に自分を捧げ、魚をさばき続けて来たことを思うと――神の恵みは、人間の手の上にも、きらりと光る刃こぼれした魚包丁の上にも、降ってきてくださることを私は知る」(カルビン・シルベルド)。「与えられている場で、自分の役割を果たしながら、心を込めて人と関わりながら、イエスに仕えて行く、その生き方の中に、私達の生き方を輝かせる秘訣、生きることに意義を見出す秘訣、神に豊かに生かされる秘訣、そのようなものがあるのではないか」、そのようなことも教えられるのです。

私は、こんな証を聞いたことがあります。ある方が仕事のことで大変困って助けを必要としておられました。その時、1 人のクリスチャンが仕事の手伝いをされました。助けてもらった方がそのクリスチャンの仕事の様子を見ていて、「何か天を仰いで、神様を相手に仕事をしているようだった。クリスチャンというのは、こんな風にして生きるのか、と非常に印象的だった」という証をして下さいました。イエス様は弟子達に「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」(19)と言われていますが、そのように生きることがまた、人々にイエス様を証しすることに繋がるかも知れません。

私達は、それぞれの生活の場で人と関わりますが、その人々にイエス様によって遣わされています。その遣わされた場で、イエス様を見上げながら生きる、与えられた役割を果たして行く、そのことを通

して、私達はイエス様に従って行くのです。時にその中で、神が私達に「何かをするように」特別な呼び掛けを為さるかも知れない。その時はその声に従うのです。
　信仰生活とは、そのようにしてイエス様に従う生活ではないでしょうか。

3：信仰生活の支え～主に担われて

　そのようにして歩む私達の信仰生活は、何によって支えられて行くのでしょうか。それは、まず御言葉でしょう。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」(詩篇 119:105)。御言葉を離れたら、生きた、実を結ぶような信仰生活を送ることは出来ません。「神の言葉を握って祈る」ということも出来なくなり、祈りさえも貧しくなって行きます。
　しかし、同時に私達の信仰生活を支えて行くものがあります。最初に「私達の信仰生活は、神の招きによって始まる」と申し上げました。神様は、私達をご自身が招いた故に、私達の信仰生活に責任を持って下さるのです。神は「イザヤ書」を通して私達に語られます。「あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう」(イザヤ 46:4)。 信仰生活は、私達がイエス様の袖につかまって「イエス様、私を捨てないで下さい」と言って、頑張って成り立つのではない。イエスの後をついて行こうとする私達を、神ご自身が担って下さるのです。そうでなければ、ここで召された弟子達は、信仰生活を全とうすることは出来なかったでしょう。彼らは、皆が一度イエス様を完全に捨てます。でも、その彼らのことを、イエスは責任を持って下さいました。一度捕らえた者には、イエスが責任を持って下さる。「あなたは私が招いた。そのあなたを私が捨てることはない」と言って担って下さいます。この神の守りが、私達の信仰生活を守って、支えて行くのです。

まとめ

　信仰生活は、神の招きによって始まる。その信仰生活の中で、私達は遣わされた場所でイエス様に従って行くのです。その歩みを神が担って下さるのです。天地万物を造られた神とこのような関係に生きて行けることは大きな特権です。その特権に生かされ、イエスに従う者として、これから「山上の説教」を通してイエスに従う生き方を学んで行きたいと思います。